

# トラヤヌスのスコラ: 船大工の組合の本部か？

坂口 明(日本大学)

トラヤヌスのスコラ(IV v.15)は、オステティアの組合のスコラ(本部、クラブハウス)の中でももっとも壮大なもののひとつである(Fig. 1)。この名前は、遺構で発掘されたトラヤヌス帝の立像(Fig. 2)に由来する。このスコラは、一般に船大工(*fabri navales*)の組合の本部であったと考えられているが、その理由は、街路を挟んで船大工の神殿に向かい合って立っているということにある(Fig. 3)<sup>1</sup>。この小論の目的は、この推論を検証し、このスコラを持っていたと思われる組合についての仮説を提起することである。

## 1

トラヤヌスのスコラは、オステティアのメインストリートであるデクマヌス・マクスィムスに沿った南側にあり、広大な面積(約 2,300<sup>2</sup>)を占めている。それは、街路に面した 3 つのタベルナ(店舗)を含む建物(A)、長い泉水プールを持った大きな柱廊中庭、そして柱廊中庭のうしろの建物(B Fig. 4)からなる。建物Aと柱廊中庭は、3 世紀の初めに、共和政時代に建てられた数戸の家屋の跡に建設された<sup>2</sup>。もともとは、柱廊中庭は敷地の南端にまで広がっていた。のちに建物Bが、柱廊と泉水プールを切りつめて建設された(Fig. 5)。この建設の正確な年代については、研究者たちの見解は一致をみるに至っていないが、ほとんどのものは、3 世紀のある時期を想定している<sup>3</sup>。これらの主要な建築計画と並んで、これらの建物はしばしば改装された。このスコラの見事さと拡大の歴史は、これを建て所有した組合の継続的な繁栄と発展を物語っている。

船大工の組合の神殿(*tempio del fabri navales*)は、コンモドゥスの統治期(2 世紀末)に、フロニカ(縮絨工の仕事場)の跡に建設された<sup>4</sup>。それは、ウェスティブルム(玄関)、2 つのタベルナ、柱廊中庭、ポディウム(基壇)上の神殿、そして神殿の背後の、両側に柱廊のある中庭からなり、約 17m×60m の敷地を占めている(Fig. 6)。私的な祭祀のための神殿としては、かなりの規模を持っている。

もしトラヤヌスのスコラが船大工たちに属していたとすれば、彼らは 2 世紀末に土地を取得して神殿を建て、それから 2~30 年のちにさらに広大な土地を取得してスコラを建て、さらにおそらく半世紀たたないうちにスコラに建物Bを増設し、この間に継続的に彼らの施設を改装していた、ということになる。このクロノロジーは、オステティアの船大工の組合の歴史と一致するのだろうか。

オスティアの領域では、2つの船大工の組合が知られている。オスティアのものと、ポルトゥスのものである。オスティアの港はティベリス川の河口にあったが、積み荷を積んだ大きな海航船が停泊できるだけの大きさも深さもなかった。そこでクラウディウス帝は、約 3km 北に新しい港 (Porto di Claudio, Portus Augusti) を建設し、トラヤヌス帝はもう一つの港 (Porto di Traiano, Portus Traiani) を付け加えた。新しいこれらの港の周囲にはポルトゥスとよばれる新しい町が発展したが、この町は行政的にはオスティアに属していた (Fig. 7)。おそらくポルトゥスの船大工たちは、ある時期 (2 世紀の前半?) に新しい組合を設立した。我々は 2 つの船大工の団体の名簿を持っている。ポルトゥスで発見された *CIL* xiv.169 と、オスティアの船大工の神殿の前で発見された Bloch 1953, no.4 である。いずれの名簿にも破損があるので組合の完全な名前を知ることはできないが、前者はポルトゥスの組合のものであり、後者はオスティアの組合のもと思われる<sup>5</sup>。以後、前者を alb. Port.、後者を alb. Ost. とよぶことにする。alb. Port. は紀元 200 年ころのものと思われ<sup>6</sup>、alb. Ost. はおそらく 3 世紀初めに彫られた<sup>7</sup>。そこで、2 つの名簿はせいぜい 1 世代の間隔で作成されたと思われる。この間隔は、社会的構成の見地からこれらを比較する妨げにはならないだろう。

alb. Port. の中には、帝室の *nomen* (氏族名) を持った多くのメンバーがいる。彼らは全体の 29.6% をなす (353 中 99)。これは、オスティアの組合の中では突出した比率である<sup>8</sup>。これらのメンバーの大部分は、皇帝の被解放者かその子孫であり、国家の造船所で現場監督か労働者として働くか、あるいは下請け仕事をしていたと思われる。そこで、alb. Port. と alb. Ost. 中の帝室の *nomen* を持つメンバーを年代に従って比較してみよう (表)。ポルトゥスの組合では帝室の *nomina* は継起的に現れているのに対して、オスティアの組合ではそれらは *Iulii* の後はほとんど完全に消えている。このことは、クラウディウスの港が建造されたとき、国家の造船所がポルトゥスに移されたことを示していると考えられる。私的な造船所の一部も、同様に移されたであろう。こうして、多くの船大工はオスティアを離れ、ポルトゥスに住み着いたと思われる。だとすれば、オスティアの船大工の組合は、ポルトゥスの組

表 帝室の *nomina* を持つメンバーの数

	alb. Ost.	alb. Port.
<i>Iulii</i>	8	24
<i>Claudii</i>	-	8
<i>Flavii</i>	-	18
<i>Cocceii</i>	-	2
<i>Ulpii</i>	-	11
<i>Aelii</i>	-	24
<i>Aurelii</i>	1	11
<i>Septimius</i>	-	1

合の設立後は、停滞していたか衰退していた。alb. Port. 中に 353 の名前が数えられるのに対して、alb. Ost. には 94 の名前しか読み取れない<sup>9</sup>。これは、このような停滞あるいは衰退を反映している

のではないだろうか。

我々が再構成したオスティアの船大工の組合の歴史は、上記の考古学的なクロノロジーとは一致しない。この組合には、彼らの施設の継起的な拡大の必要もなければ、そのための資金もなかった。彼らがスコラを持っていなかったとしても、その代わりに神殿の背後の柱廊付きの中庭を、集会や宴会のために使うことができただろう。それはこの目的のために計画されたのかもしれない。

おそらくはトラヤヌスのスコラを建てた組合によって奉献されたトラヤヌスの立像は、状況的な証拠を提供する。新しい港の建設者であるトラヤヌスは、オスティアの船大工にとっての恩恵者ではなかった。ポルトゥスの組合は、彼の統治のもとで設立され公認されたのかもしれない。オスティアの組合がこの皇帝に立像を奉献したというのは、ありそうにないことである。

### 3

それでは、どの組合がトラヤヌスのスコラの所有者だったのだろうか。

ヘルマンセンとボルマンとアスコーは、船主 (*navicularii*) の組合を示唆する<sup>10</sup>。もつとも重要な証拠は、スコラで発見された碑文の断片 (*Bloch 1953, no.32*) である。ブ洛克はそれを、言葉がほとんど同一である一碑文 (*CIL xiv.3603*) に依拠して、次のように補完する<sup>11</sup>。

[/. Pacceio L. f. ] / Q PR[o pr.] / NAVICVLARIEI·O[stienses] / QUOD·IS·  
PRIMVS·SIM[ulacrum - - -] / STATVARIVM·PRO - - - - -

この碑文は、船主たちによって *quaestor pro praetore* のペッカイウスに、彼が立像を約束した (?) 故に捧げられた。碑文の年代は、*-iei* という語尾から見て、アウグストゥス時代であり<sup>12</sup>、トラヤヌスのスコラの建設よりはるかに前である。しかしこの間隔は、必ずしもこのスコラと船主たちとの関係を否定するものではない。碑文は、彼らがスコラを建てたときに、上にあった像とともに彼らによって持ち込まれたのかもしれない<sup>13</sup>。

ほかの証拠は、このスコラが属していた組合を明確に指示するものではない。スコラで発見された碑文 (*Bloch 1953, no.33*) は、予定コンスル (*consul designatus*) で都市の保護者の L・ウォルシウス・マエキアヌスに、L・ウォルシウス・マル・・・によって、紀元 160 年ころに捧げられたものである<sup>14</sup>。ウォルシウス・マエキアヌスの官職経歴 (*cursus honorum*) の中には、食糧供給長官 (*praefectus annonae*) の職、すなわち首都に食糧を供給する責任を負った職が見出される。船主たちは属州からの食糧の輸送に従事していたので、彼らのこの人物との結びつきを想定することは可能である。しかし、彼らが奉献者とどのような関係を持っていたのか、またなぜ碑文がこのスコラに持ち込まれたのかは不明である。

建物Bにあるフォルトゥナ (運命の女神) の立像も、特定の組合と関連付けることはできない。この女神と組合との結びつきは、帝国の様々な都市から多くの事例が報告されている。それらの組合は、肉屋 (*lanii*)、倉庫の主人または番人 (*horrearii*)、鍛冶屋 (*ferrarii*)、建築業者 (*fabri tignuarii*) 等々といったさまざまなグループからなっていたが、船大工も船主もこれらのグループの中には現れない。

建物Bのトリクリニウム (宴会室) の床面モザイクはどうだろうか。それは野獣、鳥、ぶどうの束をもつ翼のあるゲニウスたちあるいはアモルたち<sup>15</sup>、ウサギ、おそらくはパンの入った籠をあらわしてい

る(Fig. 8)。野獣と鳥(ライオン、豹、七面鳥)はアフリカやアジアを思い起こさせる。しかし我々には、このモザイクの意匠は船大工よりは船主にふさわしい、ということくらいしか言えない。

オステアの船主の組合については、いくらかの情報がある。川船、渡し船、はしけの所有者たちは、いくつかの組合を組織していた<sup>16</sup>。海上輸送に携わる船主たちについては、アドリア海の船主の組合(**corpus naviculariorum Hadriatici**)があったことが知られている<sup>17</sup>。この組合の船主たちはアドリア海を周航し、さまざまな物資、とくにイストリアと北アドリア海の諸地域からのぶどう酒を輸入していたと思われる。しかしこの組合の基地は、オステアではなくアドリア海沿岸、多分アクイレアにあったろう<sup>18</sup>。アウグストゥス時代には、「オステアの船主たち **Naviculariei Ostienses** が上述の碑文に現れる。彼らが公認された組合を持っていたかどうかは不明であるが、彼らは立像を奉獻するに当たって団体として行動した。2世紀末には、ある碑文が船主の組合について語っている(**corpus naviculariorum**)<sup>19</sup>。それが **naviculariei** のそれと同じグループであったのかどうか、またそれがアドリア海の船主の組合とどのような関係を持っていたのかはわからない。しかし、海上輸送に従事する多くのオステアの船主からなる組合があったということはある。もしそうだとすれば、それは建築業者(**fabri tignarii**)の組合とならんで、オステアでももっとも重要な、威信のある組合の一つだったに違いない。それにもかかわらず、彼らの施設は、組合の広場(**Piazzale delle corporazioni**)にある2つの事務所(**stationes**)を除いては、全く確認されていないのである<sup>20</sup>。トラヤヌスのスコラは、このような重要な組合の本部にふさわしいと思われる。

トラヤヌスの立像も、船主にふさわしい。彼の新しい港の建設は、彼らにとって大きな便宜であり、彼らはその活動を発展させるのを可能にしたに違いない。彼らは、大きな感謝の念を持って、立像を奉獻したのである。

総括すると、トラヤヌスのスコラは船主たちの本部であったと考えるのが、現在のところ最も適切である。



Fig.1 トラヤヌスのスコラの入り口



Fig. 2 トラヤヌスの立像 (コピー。オリジナルはオステア博物館)

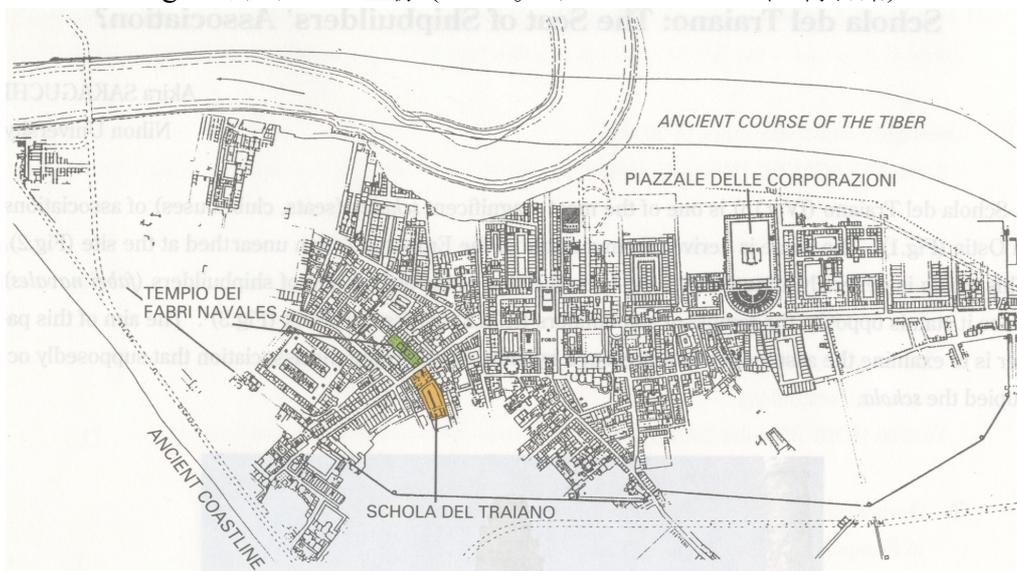


Fig.3 オステアの地図 Calza et al. 1953, fig. 36.

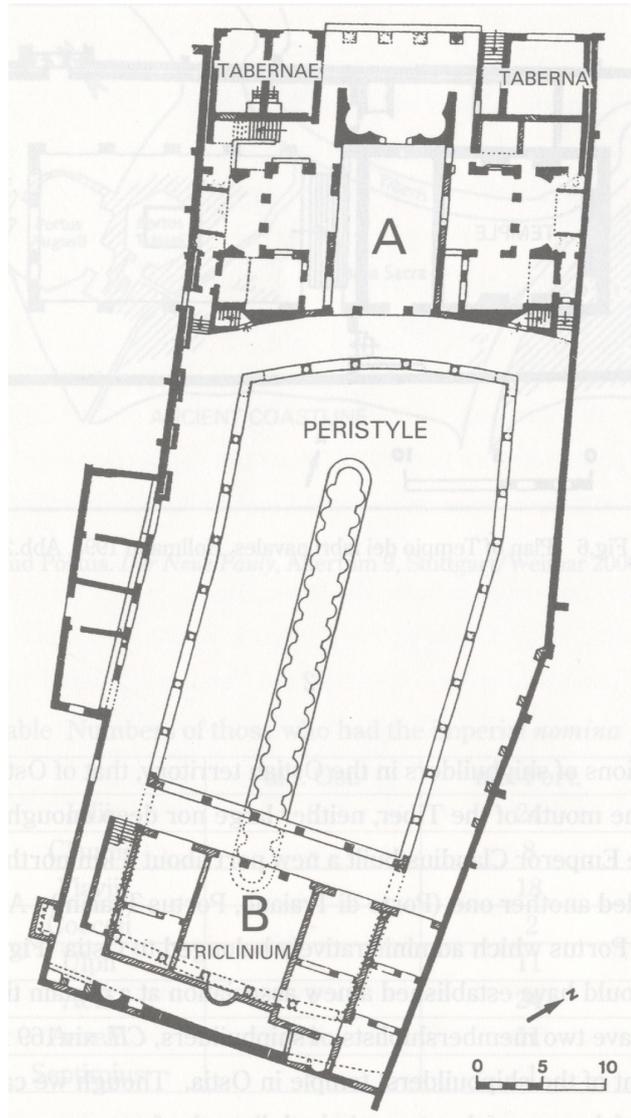


Fig.4 トラヤヌスのスコラの平面図 Calza et al.1953, piante 7, 12; Bollmann 1998, Abb.13



Fig.5 列柱中庭の泉水プールと建物B (後方)

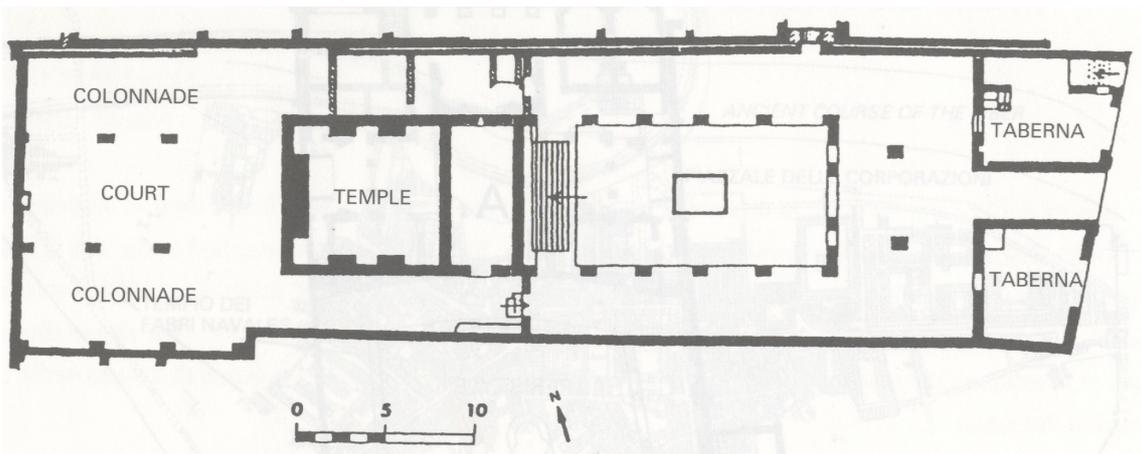


Fig.6 船大工の神殿の平面図 Bollmann 1998, Abb.21

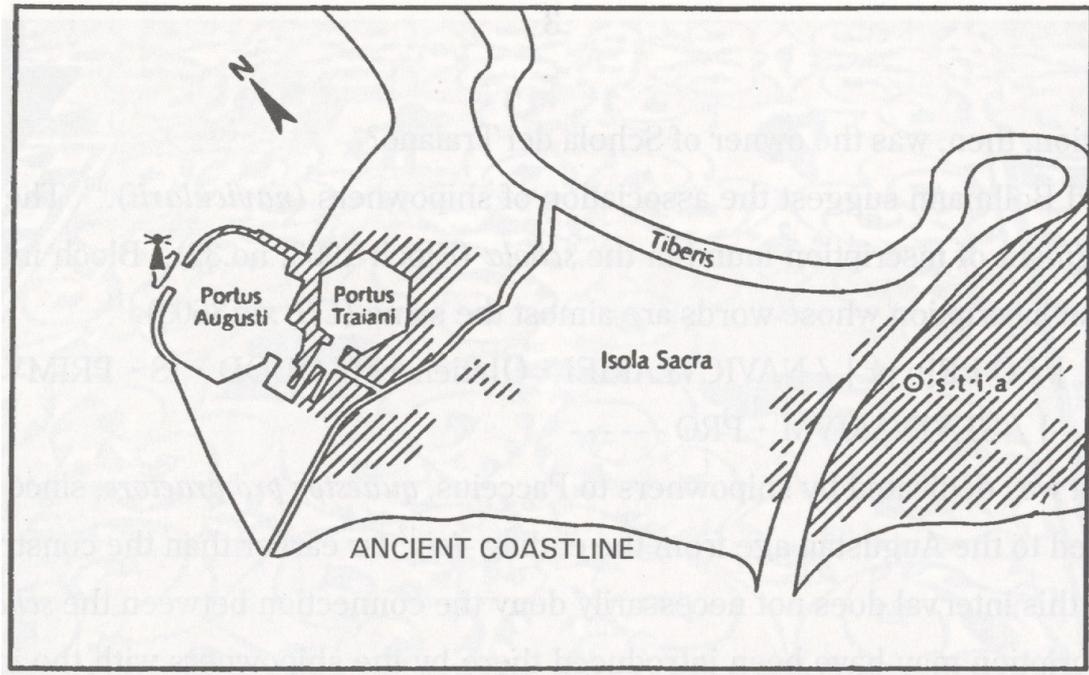


Fig.7 オスティアとポルトウス *Der Neue Pauly*, *Altertum* 9, Stuttgart/Weimar 2000, 192, Abb.



Fig.8 建物 B のトリクリニウムの床面モザイク

註

- 1 Calza et al. 1953, 146, 149; Schaal 1957, 94sq.; Calza et Nash 1959, 52sqq.; Boyle 1968, 271n.15; Scrinari et al. 1982, 76; Pavolini 1983, 144, 182; Pavolini 1991, 151; Pensabene 1996, 217; Gallico 2000, 54; Chrzanovski et al. 2001, 74; Pavolini 2006, 149sq.,190; Pellegrino 2012, 104sq..
- 2 このスコラの建設年代は、かつては、壁の構造、壁のレンガと配水のタイルの刻印、列柱の柱頭の様式から、2 世紀半ばかそれより少し前とされていた。Calza et al. 1953, 146, 226, 237; Girri 1956, 31; Lugli 1957, 610sq.; Becatti 1961, 199; Neuerburg 1965, 192; Boyle 1968, 50; Calza et Becatti 1968, 42; Pensabene 1973, 73sq.; Herres 1982, 519; Hermansen 1982, 72; Scrinari et al. 1982, 75; Pavolini 1983, 182; Bollmann 1998, 77, 326; Gallico 2000, 54; Chrzanovski et al. 2001, 76; Pavolini 2006, 190; Broquet et Gonon 2006, 62. Ascough et al 2012 は、2 世紀末とする。2000 年代初めからのフランスの学者たちによる発掘は、3 世紀初めに年代づけるべきだとする提言につながった。Parrier 2007, 15; Pellegrino 2012, 104 を見よ。
- 3 Calza et al. 1953, 156, 238 (3 世紀後半); Becatti 1961, 199-202 (セプティミウス・セウェルスの統治期、舗床のモザイクによる); Calza et Becatti 1968, 42 (3 世紀); Boyle 1968, 50 (3 世紀半ば); Pensabene 1973, 42sq. (セプティミウス・セウェルスの統治期、柱頭の様式による); Herres 1982, 519-525 (330-340 ころおよびその後、壁の構造による); Hermansen, 1982, 71 (250-300); Scrinari et al. 1982, 77 (3 世紀); Pavolini, 1983, 183 (3 世紀); Bollmann 1998, 77, 327 (3 世紀末か 4 世紀初め); Pavolini 2006, 191 (3 世紀、舗床のモザイクと壁のフレスコ画による); Broquet et Gonon 2006, 62 (セウェルス朝時代、壁の構造による)。
- 4 年代は舗床による。Calza et al. 1953, 149; Girri 1956, 25; Becatti 1961, 94; Pavolini 1983, 144; Bollman 1998, 50, 81, 306; Pavolini 2006, 149sq.; Ascough et al. 2012; Pellegrino 2012, 105.  
これを船大工の神殿とする同定は、ほとんど確実である。彼らの組合の保護者に捧げられた立像の台座が遺構で発見されており、後出の彼らの組合の名簿に現れる幾人かのメンバーが、組合のある役員と何らかの関係を持っている。坂口 2001, 21, 28n.17; 坂口 2002, 23 を見よ。神殿の下のフロニカについては、de Ruyt 1995 を見よ。
- 5 Bloch 1953, 285; Meiggs 1973, 215sq., 317, 324; Chevallier 1986, 154; Royden 1988, 30-33. トランは、2 つの名簿が、同じ組合の 2 つの大きく離れた時点のメンバーを反映している可能性を提起している (Tran 2006, 315)。しかし 2 つの名簿の名前を分析すると、そのような可能性は排除される。坂口 2001, 21sq.および本稿後出。

- 6 Bloch 1953, 285 (“difficilmente può essere anterior alla fine del secolo II”); Meiggs 1973, 317 (“probably from the Severan period”); Tran 2006, 315 (“peut être...sous le principat de Com- mode”).
- 7 Bloch 1953, 285 (“nei primi decenni del terzo secolo”); Tran 2006, 315 (“proche de l’édit de Caracalla”).
- 8 オステアの船大工の組合: 11.1%.  
Corpus lenunculariorum tabulariorum auxiliariorum Ostiensium: 12.9% (152 AD, *CIL* xiv. 250), 10.7% (192 AD, *CIL* xiv.251).  
Collegium fabrum tignariorum Ostiensium: 21.2% (198 AD, *CIL* xiv.4569).
- 9 Alb. Ost.は2本の石柱に彫られており、一本には2つの面に、もう1本には1つの面に彫られている。一本目には組合の役員が現れているのでこれが最初であり、もう一本は1面で終わっているのが最後である。ボルマンは、間にほかの石柱があったと推定し、メンバーの数を150-200と見積もっている(Bollmann 1998, 50sq., 54)。その可能性は排除できないが、本文に述べた私の推論が正しいとすれば、現存の2本の石柱が、欠けた部分を別にして、完全な会員名簿を表していると考えるのが適切である。
- 10 Hermansen 1982, 72sq.; Bollmann 1998, 77, 198, 327 (*fabri navales* か *navicularii*); Bollmann 2001, 176 (“peut être”); Ascough et al 2012, 235 (“clealy”).
- 11 Bloch 1953, 269.
- 12 Bloch 1953, 270; Hermansen 1982, 72sq.; De Salvo 1992, 376.. 対をなす碑文 *CIL* xiv.3603 も、同様にアウグストゥス時代のものである。*CIL*, etc.のデッサウの注釈を見よ。
- 13 デ・サルヴォは、ペツカイウスの職名 *quaestor pro praetore* を、リックマンとヒューストンに従って、ローマからオステアまでのティベリス川兩岸の監視官と解釈し、*naviculariei* というのは海航船の所有者ではなく、地域内の輸送に携わっていた小舟の船頭であったと主張する(De Salvo 1992, 376)。この議論は、私には説得的とは思われない。
- 14 Bloch 1953, 270sq. 年代決定は、同じ人物に捧げられたもう1枚の碑文 *CIL* xiv.5347 にもとづく。
- 15 Beccati 1961, 200; Calza et Becatti 1968, 43; Pavolini 1983, 183; Bollmann 1989, 326; Pavolini 2006, 191.
- 16 Aicher 1947, 85-109; Licordari 1987; Royden 1988, 33-51; De Salvo 1992, 147-182; Herz 1994.
- 17 Meiggs 1973, 275sq.; Pellegrino 1987; De Salvo 1992, 429-437.
- 18 De Salvo 1992, 431-437.
- 19 *CIL* xiv.4648: ---]CORP NAVICV[---
- 20 2つの *stationes* の前の舗床のモザイクに “*navicularii et negotiantes de suo*” という文字を読み取ることができる (*CIL* xiv. 4549.15, 16)。しかし、これらの *navicularii* があの *corpus* のメンバーであったということは明らかではない。これらの *stationes* は、この広場のほかの *stationes* と同様に、属州から来た船主のものだったのかもしれない。

## 引用文献

- Aicher 1947: H. Aicher, *Die Berufsgenossenschaften in Ostia auf Grund ihrer Inschriften*, Diss. Innsbruck.
- Ascough et al. 2012: R. Ascough, Ph.A. Harland, J.S. Kloppenborg, *Associations in the Greco-roman World. A Sourcebook*, Waco.
- Beccati 1961: G. Becatti, *Scavi di Ostia IV. I mosaici e pavimenti marmorei*, Roma
- Bloch 1953: H. Bloch, Ostia
- Iscrizioni rinvenute tra il 1930 e il 1939, *Notizie degli scavi di antichità*, ser.8, vol.7, 239-305.
- Bollmann 1998: B. Bollmann, *Römische Vereinshäuser*, Mainz.
- Bollmann 2001: B. Bollmann, Les collèges religieux et professionnels romains et leurs lieux de réunion à Ostie, in J.-P. Descœudres (dir.), *Ostia. Port et Porte de la Rome antique*, Genève, 172-178
- Boyle 1968: B.M. Boyle, *Studies in Ostian Architecture*, Diss. Yale U.
- Broquet et Gonon 2006: C. Broquet et I. Gonon (tr. E. Olivieri) Ostia antica e la magnifica Schola del Traiano, *Archeologia viva* 117, 60-65.
- Calza et al. 1953: G. Calza et al., *Scavi di Ostia I. Topografia generale*, Roma.
- Calza et Becatti 1968: G. Calza, G. Becatti, *Ostia*, Roma.
- Calza et Nash 1959: G. Calza, E. Nash, *Ostia*, Firenze.
- Chevallier 1986: R. Chevallier, *Ostie antique*, Paris.
- Chrzanovski et al. 2001: L. Chrzanovski, Cl. Klause, A. Pellegrino, Les nouvelles fouilles de la Schola del Traiano, in J.-P. Descœudres (dir.), *Ostia. Port et Porte de la Rome antique*, Genève, 74-78.
- De Salvo 1992: L. de Salvo, *Economia privata e pubblici sevizi nell'Impero romano. I corpora naviculariorum*, Messina.
- De Ruyt 1995: C. de Ruyt, Recherche archeologiche nel Tempio dei Fabri Navales a Ostia, S. Quilici Gigli (a cura di), *Archeologia Laziale* XII 2, 401-406.
- Gallico 2000: S. Gallico, *Guide to the Excavations of Ostia Antica*, Roma.
- Girri 1956: G. Girri, *La taberna nel quadro urbanistico e sociale di Ostia*, Roma.
- Hermansen 1982: G. Hermansen, *Ostia. Aspects of Roman City Life*, Alberta.
- Herres 1982: Th.L. Herres, *Paries. A Proposal for a Dating System of Late Antique*

- Masonry Structures in Rome and Ostia*, Amsterdam.
- Herz 1994: P. Herz, Kollegien in Ostia. Gedanken zu den Inschriften CIL XIV 250 und 251, R Günther, S. Rebenich (Hrsgg.), *E fontibus haurire. Beiträge zur römischen Geschichte und zu ihren Hilfswissenschaften*, Paderborn/München/Wien/Zürich, 295-325.
- Licordari 1987: A. Licordari, I «Lenuncularii Traiectus Luculli» ad Ostia, *Miscellanea greca e romana* XII, Roma, 149-160.
- Lugli 1957: G. Lugli, *La tecnica edilizia romana*, Roma.
- Meiggs 1973: R. Meiggs, *Roman Ostia*, 2nd ed., Oxford.
- Neuerburg 1965: N. Neuerburg, *L'architettura delle fontane e dei ninfei nell'Italia antica*, Napoli.
- Parrier 2007, B. Parrier, Les trios edifices successifs: Schola du Trajan, Domus à Péristyle, Domus aux Bucranes, in B. Parrier (éd.), *Villes, maisons, sanctuaires et tombeaux tardo-républicains: découvertes et relectures récentes*, Roma, 15-32.
- Pavolini 1983: C. Pavolini, *Ostia*, Bari.
- Pavolini 1991: C. Pavolini, *La vita quotidiana a Ostia*, Roma/Bari.
- Pavolini 2006: C. Pavolini, *Ostia* (nuova edizione), Roma/Bari.
- Pellegrino 1987: A. Pellegrino, I navicularii maris Hadriatici ad Ostia, *Miscellanea greca e romana* XI, Roma.
- Pellegrino 2012: A. Pellegrino, *Ostia. Guida agli scavi*, Roma.
- Pensabene 1973: P. Pensabene, *Scavi di Ostia* VII. I capitelli, Roma.
- Pensabene 1996: P. Pensabene, Communitenza pubblica e committenza privata a Ostia, in A. Zevi, A. Claridge (eds.), *Roman Ostia revisited*, London, 185-222.
- Royden 1988: H.L. Royden, *The Magistrates of the Roman Professional Collegia in Italy from the First to the Third Century A.D.*, Pisa.
- Schaal 1957: H. Schaal, *Ostia. Welthafen Roms*, Bremen.
- Scrinari et al. 1982: V.S.M. Scrinari et al., *Ostia and Porto*, Milano.
- Tran 2006: N. Tran, *Les membres des associations romaines. Le Rang social des collegiati en Italie et en Gaules sous le haut-empire*, Rome.
- 坂口 2001: 坂口 明「オステアの船大工の組合(上)」『研究紀要(日本大学文理学部人文科学研究所)』61, 19-31
- 坂口 2002: 坂口 明「オステアの船大工の組合(下)」『研究紀要(日本大学文理学部人文科学研究所)』63, 17-29.